

大阪ワークショップ at 天王寺動物園 (2003年3月11-12日)

検証プログラム「動物解説パネルを作ろう」

概要：参加者自身が計画から設計、評価までを行う解説パネル作成プログラムに、園館職員と教員、一般市民が共同で取り組むことで思いや問題意識を交換し、同時にこのプログラム自体の普及を目指す。1日目に導入、事前調査を行い、実際にパネルを作成した。2日目は作成したパネルを展示し、その評価、ディスカッションを行った。

導入：参加者約50人を9つのグループ(園館関係者約20人、教育関係者3人、一般市民約25人)に分け、参加者の展示に対する思いを出し合い、計画から作成、評価というパネル作成の筋道を確認した。アイスブレイクの内容や手法が不十分だったものの、参加者の様々な思いを引き出すことができた。



パネル作成：グループ毎に設置場所の下見を行いパネル作成の計画を立て、それに従って用意してあった様々な道具や材料を利用してパネル作成を行った。パネルを設置する場所、対象動物の選定、解説内容、おもいを伝えたい対象、手法、評価方法などを、異なる立場の参加者が話し合い工夫していくことで、ディスカッションからモノを作っていくことの重要性を実感することができたであろう。



パネル評価と報告会：作成したパネルを実際に展示し、そのパネルが持つ効果を測定し、分析・発表を行った。来館者の行動調査や発話調査などを通し、作成したパネルが多少なりとも一般来園者の新しい興味を引き出すことができたことを確認できたグループや、自分の思いと来館者の求めているもののずれを感じることができたグループなど、様々な報告がなされた。参加者は評価することを意識しながらパネルを作成し実際に評価することで、課題を見つめその改善案を考えることの意味を理解することができたであろう。

まとめ：報告をもとに、利用者のニーズとそれを探ることの難しさ、子どもの興味と発達要求、擬人化という手法の持つ意味、動物を見てもらうためのきっかけを作ることの重要性などについて議論された。また、トピックスとして天王寺動物園での実際の展示を作るときの工夫や、教育担当者の思いなどをご報告いただいた。発言者が多少偏ってしまった、このプログラムを実際に園館で実施することについてまで話が及ばなかったなどの反省点はあるものの、議論に比較的十分な時間を取ることができ、ある程度視点を絞って様々な意見を聞くことができたことは非常に有意義であった。

開発プログラム実践：展示を観察し利用者のニーズや評価方法までを考えて、話し合い中からパネルを作成することで、自分の思いやそれを実現する方法、工夫と改善に向けた評価の大切さまで深く議論することができることがわかった。また、一連の協働作業を通じて、立場の違いや自分とは違う視点・思いを理解することができた。



教育普及：今回のワークショップは一般市民対象のプログラムを園館関係者向けにアレンジしたものであるため、このプログラムの普及という意味では弱かったが、総合的な学習の時間や学芸員実習など、長い時間をかけて一つのプログラムに取り組める場での良い手法であることが確認できた。

記録：開催協力：大阪市天王寺動植物園事務所、松本朱実(動物教材研究所 pocket)、尾崎公子(堺女子短期大学)、女の目で大阪の街を創る会、小笠原あや(自然教育研究センター)。検討委員：山本茂行(富山市ファミリーパーク)、松田征也(滋賀県立琵琶湖博物館)、松井桐人(横浜市立よこはま動物園ズーラシア)、小林毅(自然教育研究センター)。取材：読売新聞、産経新聞、毎日新聞、大阪日々新聞、朝日新聞、共同通信。